

- 第7章 パリの給水事業と衛生
 第8章 パリの下水事業と衛生
 第9章 不衛生住宅の衛生化法
 第10章 住宅改革の思想と運動—低廉住宅の誕生

そして「総括と展望」として『近代化と国民国家の形成とが、公衆衛生の制度化を梃子にすすめられた明治期の日本とは違って、フランスでは近代市民社会の行政機構の一部として公衆衛生が制度化された。しかし、フランスの常として、衛生行政はかたちはあるが、内実を伴わなかつ

た。……』と書いている。日本の公衆衛生史、結核史、行政史と引き合わせながら読むことも有用であるが、社会インフラとしての都市計画や環境衛生の問題・建築史・社会史を骨子として結核を論じた大冊であり、日本の結核史などにおいてはあまり触れられていない視点が多く述べられている。一読を勧めたい一書である。

(渡部 幹夫)

〔学術出版会 学術叢書, 〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2, TEL. 03 (3947) 9153, 2014年5月, A5判, 616頁, 9,200円+税〕

Florence Nightingale 著

“Notes on Nursing” (初版〈復刻版〉)

1860年に出版された F. Nightingale, *Notes on Nursing: What it is, and what it is not* (フローレンス・ナイティンゲール『看護覚え書：何が看護であり、何が看護でないか』)の初版本(原本所蔵者：丸山マサ美・木村専太郎両氏)の復刻である。日本でも何種類もの翻訳・抄訳や解説が出版されている不朽の古典だが、原典にあたることで得られることもいろいろあるに違いない。裏表紙などに掲載されていたと思われる当時の版元の広告まで含めて、原本がほぼそのままのかたちでリプリントされているため、史料として手元に備え

ておくのにも適している。本書をめくってみると、看護のあり方や看護の歴史はもとより、英国ヴィクトリア時代中期における医療現場の状況、保健上の諸問題、公衆衛生思想、ジェンダー認識などを考究する際にも、本書が重要な手掛かりに満ちていることを改めて認識させられる。

(永島 剛)

〔丸善出版, 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17, TEL. 03 (3512) 3256, 2017年4月, A5判, 288頁, 定価2,100円+税〕

日本大学医学部同窓会 編, 宮川美知子 著

『醫の肖像—日本大学医学部コレクション—』

日本大学医学部同窓会編として出版された『醫の肖像—日本大学医学部コレクション—』を紹介する。本書は日本大学医学部同窓会の新聞担当理事を務める宮川美知子氏が、年10回発行される日大医学同窓新聞に「知っていますか? 医学部資料室」というシリーズ(平成11年3月号開始)を掲載、それを基に一書に纏めたものである。『日本大学医学部図書館古医学資料目録』から毎号史料一点を選び、平成29年3月号で179

回の連載となったとのことである。本書はそのうちの興味深い76編について写真や文章を調整して編集したものである。日本大学医学部創設以来の多方面からの寄贈資料の目録化は昭和56年から小川鼎三、酒井シヅ両教授により行われ現在の目録が残るわけであるが、内山孝一旧蔵古医書及び富士川游文庫がその主体となっているという。加えてシカゴ大学・ハワイ大学・中山医科大学の病理学教授を歴任したOlaf K. Skinsnes博士から

の寄贈を受けた錦絵が含まれている。昭和59年に発刊された『日本大学医学部図書館古医学資料目録』の編纂に当たった酒井シヅ教授は、本書の「発刊によせて」で内山孝一、石原明の両氏がコレクションの収蔵に大きく関与されたと考えたとしている。宮川美知子氏はすでに『醫の散歩道』（非売品）として上記連載を4冊上梓しているという。今回、図、文を加えて本書がカラー版の大変読みやすい醫の古典の紹介書として発刊されたものである。医史学をまなぶ人に有用となることを期待して章立てを紹介する。なおこれらの資料へのアクセスは日本大学医学部図書館への連絡により申し込み書類の提出後許可をうけて可能となることを確認しております。

第1章 古代の医学・医療

1. 古代ギリシャ
2. 古代中国

第2章 中世の医学・医療

1. 日本
2. 中国
3. 朝鮮
4. 西洋

第3章 近世の医学・医療

1. 西洋医学の伝来
2. 江戸前期・後世方
3. 江戸中期・古医方

4. 江戸後期・折衷派
5. 江戸の外科医術
6. 幕末の蘭方と漢方

第4章 医学の進歩と江戸庶民の健康意識

1. からだの仕組み
2. くすり
3. 民間の健康法
4. 天然痘
5. 麻しん
6. 出産
7. 江戸の医療と風俗
8. 番外編

第5章 近代の医学・医療

1. 西洋医学教育を導入
2. 幕末から明治へ

第6章 近代から現代の医学へ

1. 日本
2. 海外

なお巻末には参考文献と本文にかかわる年表が掲載されている。豊富な図版の楽しい一書である。一読すると原資料にあたりたいという気持ちを禁じえなくなる解説がついており紹介します。

(渡部 幹夫)

[人間と歴史社, 〒101-0052 千代田区神田小川町26, TEL. 03 (5282) 7181, 2017年6月, A5判, 287頁, 2,500円+税]

森川 潤 著

『青木周蔵——渡独前の修学歴——』

1891(明治24)年、来日中のロシア皇太子(のちのニコライ2世)が斬りつけられ負傷した「大津事件」の際、外務大臣だったのが青木周蔵(1844-1914)である。1868(慶應4)年長州藩留学生としてドイツに留学、1873(明治6)年の外務省入省後も、長らく駐独公使を務めた。大津事件により外相辞任を余儀なくされたが、その後も欧米列強との条約改正交渉に深く関わったことで、明治外交史に名を残している人物である。

その青木周蔵は、現在の山口県南西部、旧・厚狭郡の地下医(民間医)三浦家に生まれ、蘭方医として名高い青木周弼の弟・研蔵の養子となった。本書は、青木周蔵の外交官としての事績ではなく、ドイツ留学前、医家の後継者として彼がどのような修学履歴を経たのか、どのような人的な繋がりのもとで彼が自己形成していったのかについての詳細な研究である。以下に目次を掲げておこう。